

「異邦人」を生んで芸能界を引退
神のために歌う「音楽伝道者」へ

久米小百合氏

音楽伝道者



Sayuri Kume _1959年東京都生まれ。1979年シンガーソングライター・久保田早紀としてデビュー。「異邦人」がミリオンセラーとなる。現在は久米小百合の本名で教会音楽家・音楽伝道者として活躍。各地の教会や学校などでコンサート活動を行うほか、聖書を楽しく学ぶ「バイブル・カフェ」を通してクリスチャンカルチャーを伝えている。作品に「天使のパン」「Tehillim33」「はじめの日」などがある。



「天使のパン」
くめさゆり・さんびか集
(2009/6/24発売、ミディ)

CAREER CRUISING

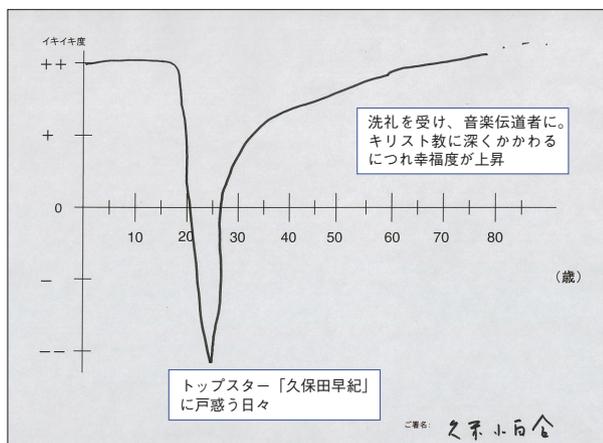
キャリア・クルージング

Interview = 泉 彩子、大久保幸夫
Text = 泉 彩子 (58~60P)
大久保幸夫 (61P)
Photo = 刑部友康

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

久米小百合氏 キャリアヒストリー

1959年	0歳	東京都・国立市生まれ。当時、父は通訳として立川基地に勤務。外国の空気を感じながら育つ
1963年	4歳	母の希望でクラシックピアノを習い始める。友だちの影響で小学校3年生から2年ほど教会の日曜学校に通い、賛美歌に親しんだ
		 <p>5歳の誕生日パーティ。ひとりっこのため、両親の愛を独占できた</p>
1972年	13歳	八王子に引っ越す。中学・高校時代はニューミュージックやロックなどを聴く「普通の女子学生」。一方で、ソニーの社員としてイランに単身赴任していた父が持ち帰る中近東音楽に惹かれていた
1978年	19歳	共立女子短期大学在学中に自作の歌を録音したテープをCBSソニーに送り、オーディションに合格
1979年	20歳	「異邦人」でデビュー。サンヨーのCM曲にも起用され、翌年の年間売上げ枚数140.4万枚を記録
		 <p>「久保田早紀」は20代とは思えぬほど大人びて神秘的なイメージだった</p>
1981年	22歳	さまざまな曲調に挑戦し、自分の音楽を模索した時期。再び教会に通うようになり、洗礼を受ける
1984年	25歳	芸能界を引退。翌年に音楽家・久米大作氏と結婚
1993年	34歳	東京バプテスト神学校神学科を卒業。教会音楽家・音楽伝道者として本名で音楽活動を行う
1997年	38歳	長男を出産
2009年	50歳	出産後初のアルバム「天使のバン」をリリース



直筆の人生グラフ。「異邦人」のヒットで忙しい日々を送り、自らの音楽について葛藤した20代前半に急下降。教会に通い始めてからはプラス基調に。

教会やミッションスクールなどでのコンサート活動を中心に、音楽を通してキリスト教の世界を世の中に伝えている久米小百合氏。久米氏は20歳から5年間、シンガーソングライター「久保田早紀」として芸能界で活躍。作詞・作曲を手がけたデビュー曲「異邦人」は異国情緒あふれる独特の旋律で、誕生後30年を経た今も多くの人に愛されている。それほどまでの名曲を生み出した「久保田早紀」と訣別し、本名の久米小百合として教会音楽の道に進んだのはなぜだったのだろうか。

デビュー曲がいきなりの大ヒット 暴走列車に乗ったような日々だった

就職活動を前に将来を迷っていた短大時代、自作の歌をテープに録音し、レコード会社の新人オーディションに応募。「敏腕プロデューサー」として後に名を馳せる金子文枝氏に見出され、プロを目指して曲作りを始めた。「異邦人」も当時書きためていた曲の1つで、通学途中のJR中央線のなかで、ふとした瞬間に生まれたという。「作るというよりは鼻歌感覚。その曲でデビューし、あそこまでのヒットになるとは想像もしませんでした」

最初はレコード店に自分の作品が並ぶだけでうれしかった。だが、CM起用の反響もあって「異邦人」は発売後半年でミリオンセラーに。空白だったスケジュール帳が黒く埋められるにつれ、不安が膨らんでいった。

「自分の実力とは関係なく、曲だけが独り歩きしていることに気づいたときに、青ざめました。でも、先々の仕事まで決まっていた、引き返すわけにはいかない。目の回るような忙しさのなかで、『久保田早紀』という暴走列車に必死でしがみついているような感じでした」

ヒット曲ばかりを追いかけることに疲れ果て、自らの音楽のルーツを振り返るうちに辿り着いたのが、賛美歌。子どもの頃に友だちに誘われて通った日曜学校で歌った「主われを愛す」という曲だった。

「自分を見つめ直すために再び教会に通い、この世界には自分だけを頼りに生きる人生と、神のゆるぎない愛を信じ、そこに根ざして生きる人生があると教えられました。それまでの私は信じるものが自分しかなく、歌手としても他人と自分を比べては一喜一憂していました。だけど、これからはそうではない生き方がしたい。そんな思いから洗礼を受け、クリスチャンになりました」

結婚を機に芸能界を引退

「久保田早紀」の名前を捨てた

後に音楽伝道の道を歩む久米氏だが、洗礼を受けた当初は信仰と音楽を直接的に結びつけてはいなかった。

「ただ、『久保田』時代の後期は『何のために歌うのだろう?』という問いの答えをいつも探していました」

そんなときにゴスペル・シンガーの小坂忠^{ちゅう}氏やロックバンド「ゴダイゴ」のベーシストであるスティーブ・フォックス氏など、芸能界から距離を置き、牧師や宣教師そして音楽伝道者として活動する友人たちと出会った。

「音楽伝道の仕事というのは、簡単にいえば、牧師さんが教会でお話をされるように、神様のメッセージを音楽で伝えること。音楽で神様に役立てる道もあると教わったのは印象的でしたが、洗礼を受けたとはいえ熱心な信者でもない私に何ができるかはわかりませんでした」

それでも、「芸能人・久保田早紀」として派手な活躍が求められる生活だけは断ち切らなければと感じた。

「仲間内の音楽談義で小坂さんが『音楽にはティッシュペーパーのように消費される曲もあれば、使いなじんだタオルのように長く愛される曲もある』とよく話してくれました。私が作りたいのは後者。でも、周囲から期待されるのは前者のように思えてなりませんでした。だから、結婚を機に引退したときはスッキリした気持ち。名前を捨てるといって大げさですが、『久保田早紀』という名前は二度と使いたくないと思っていました」

引退後は専業主婦に。求めに応じて教会で歌うことはあっても、あくまでも「お手伝い」と考えていた。

「ところが、あるミッション系の大学で歌った後に、学生さんたちからの教義に関する質問に十分に答えられなくて。クリスチャンとして歌うからには聖書のことをもっと知りたいと、神学校に入学して勉強しました」

卒業後は「音楽の経験を活かしたら?」との周囲の励ましもあり、音楽伝道者としての道を歩み始めた。

音楽で神の愛を伝える今、ようやく

「異邦人」に意味を見出せた

現在は伝統的な賛美歌だけでなく、コンテンポラリー・クリスチャン・ミュージック (CCM) と呼ばれるオリジナルの賛美歌も歌う。CCMは、欧米では確立された



音楽ジャンルで、曲調も自由だ。

「教会などでのコンサートでは、賛美歌はもちろん、ポップスや童謡、『異邦人』を歌うこともあります」

たとえ歌う曲は同じであっても、芸能界で歌っていたときと根本的に違うのは、自らに注目してもらう仕事ではないということ。プロとして聴衆に聴いてもらうための工夫はもちろんするが、「歌うのは神様のため」だ。

「だから、お客さまがいなくても歌います。とはいえ、正直なところ、体験するまでは自分でも確信はありませんでした。ところが、実際にそういう日があったんです」

礼拝者が誰もいない教会の扉を大きく開け放ち、いつも以上に響く声でメッセージを伝える牧師の姿に胸を打たれ、自らも全身全霊で歌った瞬間に、伝道者として歌う意味が腑に落ちたという。

「神様のために歌うというのは、ただ神様のことを伝えることにのみ力を注ぐこと。その伝え方が不十分で自分の不甲斐なさを教えられることはあっても、お客さまの数を気にする必要はないということを感じました」

何のために歌うのか。その答えを見つけ、人生に心から喜びを感じる今、久米氏は「異邦人」という曲を「私にとっても大事な懐メロ」と話す。

「芸能界で自分の音楽を見つけられず苦しんだ私にとって、あの曲は葬り去りたい過去。でも、音楽伝道の仕事に出会い、息子も授かった10数年前からでしょうか。『異邦人』がみなさんに大事にいただいていることを素直にうれしいと感じるようになりました。今では『異邦人』も芸能界で仕事をした経験も、すべて神様が私に与えてくれた贈り物だと感謝しています」

■ 久米小百合氏のキャリアをこう見る

久保田早紀という名前を封印して 「業界」から「教会」へのトランジション

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

私が大学1年生のとき、国立市のMilky Wayというライブハウスに、久保田早紀氏のザ・ベストテンの中継を観に行った。彼女は国立市の出身である。その後雑誌で、「異邦人」という曲は、中央線に乗っているとき、国分寺駅から国立駅にかけての間にすらすらとメロディ・ラインが浮かんできてできた、と読んだ。「どうしてあのようなすごい曲がそんな簡単に作れるのだろう?」「一生に一度は、神様が降りてきたかのように、すごいことができるものなのだろうか?」——学生の私にとって、そんな疑問を抱くほど、衝撃を受けた曲だった。「異邦人」は歌謡曲やニューミュージックといったそれまでの音楽にはない曲調だったし、今聴いてもまったく古さを感じない。多くの歌手がカバーし、カラオケでは今も歌われている、まさしく次世代に残る名曲だと思う。

しかし彼女にとって、「異邦人」を作った頃の経験は、バラ色の美しい過去ではなかったようだ。曲が売れたことで、「久保田早紀」と本当の自分と乖離して、その姿を演じることが苦しくて仕方がなかったのだ。

5年の芸能生活に区切りをつけた後、彼女は「久保田早紀」という名前を封印した。「早紀ちゃん」と声をかけられても素直に反応できない自分がいて、「異邦人」を歌うことにも抵抗があったという。「古新聞を出すように、その当時のことも過ぎたこととして捨ててしまいたかった」と彼女は言う。

キャリアのトランジション理論で知られるブリッジズ氏 (W.Bridges) は、キャリアの転換を図るときには、それまでのことにけじめをつけて終了(終結)させ、一定の空白期間を持つ(中立圏)ことが多いと分析している。

久米氏が、芸能界での経験を前向きに考えられるようになったのは10数年前からだということになる。空白期間は約15年ということになる。もちろんその期間も音楽伝道の仕事をされていたが、過去を前向きに評価できるようになって、現在の仕事がより豊かになったのではないだろうか。

「異邦人」という名曲の価値は、これからもっと高まるように思う。これまでの経験を賛美歌の世界でどう活かしてゆくのか。久米小百合氏のこれからの音楽活動に注目したい。

◆ 久米小百合氏のトランジション

